

長尾和宏様

ワープロ文字で失礼します（悪筆で文字が右肩上がりになっていく癖があります。また、タイピングした方が早いものからです）。

昨日の映画の試写会、本当に感動しました。

未だ感動の余韻が残っています。

これ迄観た映画の中で私のベストワンは「ニューシネマパラダイス」でしたが、「痛くない死に方」とドキュメンタリー映画「けったいな町医者」が私のベストワンに輝きました！

長尾先生は患者の命と人生に真心を持って向き合い、寄り添っておられる現代の「赤ひげ先生」だと思います。そして、あの世へ向かおうとする魂を痛み少なく、より安らかに穏かに旅立たせる「魂の産婆さん」でもあると思います。

また先生は、患者さんだけでなく、在宅介護をするご家族まで明るく励ましておられますね。

2本の映画から終末期医療の実態、尊厳死、リビングウィルの考え方など理解することができました。現代医学は「病は敵」「死は敗北」という考え方を改め、「死は敗北ではない」と思える医療にシフトしていくべきと感じます。先生はそのことを訴えられているのですね。

死とは何か？を深く考えることで、生きるとは何かを考えさせられました。

「人生とは時間である」と言った人がいます。オギャーと生まれた瞬間から既に死に向かっている砂時計が少しずつ落ちていきます。

キュルケゴールがいったように「人生は死に至る病」なのか？また、お釈迦さんは「生老病死は浮世の定め」とを2500年前に説きました。「死」は一般庶民はもちろん、天皇陛下でもローマ法王でも大企業の社長でも避けては通れません……。

昨日の映画を観てから、私は人はなんのために生きているのだろうか？を改めてより深く考えています。

人は誰しも70年～80年くらいの時間の中を「生老病死」や「四苦八苦」を体験しながら、感じながら生きていきます。それはとてもつらい時間です。人生という砂漠の中には、心休まる「オアシス」は本当に少ないです。もぐら叩きゲームみたいに、死ぬまで問題や苦しみといったモグラをあくせく叩いていきます。

そんな中でも人は生きてゆかねばなりません。

この映画を観て、どうせ生きるなら、どんな苦しみや痛みの中にあってもあっけらかんと明るく最後まで生き抜いてやるぞ！という思いが強く湧いてきました。

たとえ末期癌になったとしても、宇崎竜童さんが演じた患者のように枯れていきたいと私は思っています。見事に枯れるには、酸素とブドウ糖が問題だということが理解できました。川柳はいいですね！私もクスッと笑える川柳を創ろうと思いました。

スパゲッティ症候群となってベッドに縛られて終わるのは絶対に嫌です！最後まで、自分らしくできることをしていきたいです！そして尊厳を持って安らかに穏かにありがとうと言って家族に見守られながらあの世に旅立ちたいです！

最後になりましたが、先生の一人紅白歌合戦いいですね～！

桑田圭佑さんみたいに歌を楽しんでおられますね♪

ドキュメンタリー映画の中での最初の曲は尾崎豊の「15の夜」でしたね。

私は尾崎豊が大好きでカラオケでもよく歌います。

それから、玉置浩二の「ひとりぼっちのエール」、この曲も大好きです。

「心が痛んでも寒い夜はいつか終わる」「太陽に向かって祈ってきたものは限りある命の美しさ」、歌詞もいいですね！

これからは私も先生にエールを送り続けます。そして先生の行っておられる終末期医療を一人でも多くの人に伝えていきます！この2本の映画を観るように家族や友人知人に勧めていきます。また、病になっても老いを迎えても、命の炎が小さくなりつつあっても、どんなにみじめさを感じていても、生きるって素晴らしいんだよ！ということを私なりに伝えていきます！まず私自身がそのように生きていこうと思います。